

上田市文化財調査報告書第77集

HACHI

MAN

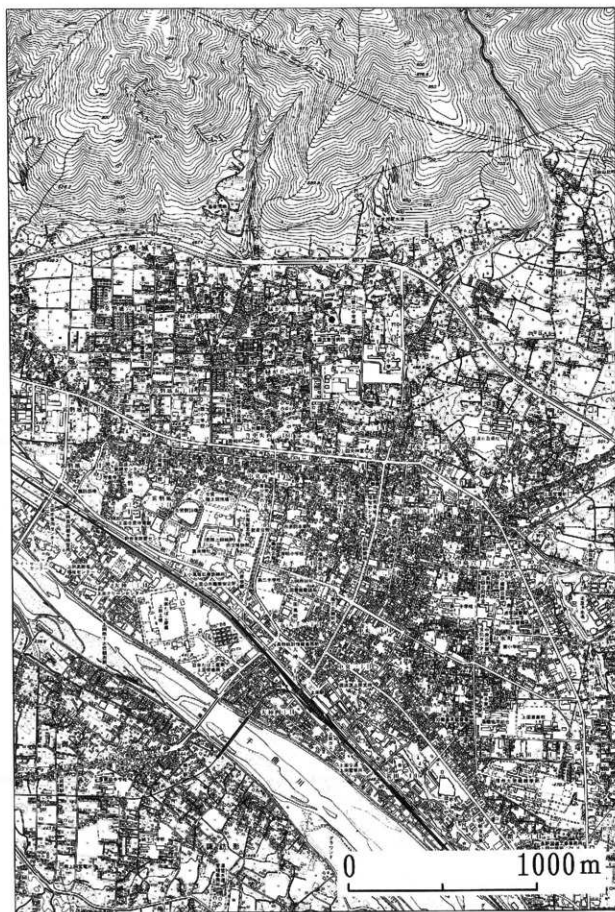
URA

八 幡 裏 遺 跡 Ⅴ

国立長野病院北側駐車場造成に伴う遺跡発掘調査報告書

1999. 3

上田市・上田市教育委員会
上田市土地開発公社



第 1 図 調査地位置図 (1)

例 言

- 1 本書は、長野県上田市中央北三丁目3253-4における、国立長野病院北側駐車場造成に伴う、八幡裏遺跡第V次発掘調査（略称：八幡裏遺跡V）の報告書である。
- 2 調査は、上田市土地開発公社の委託に基づき、上田市（上田市教育委員会事務局文化課）が実施した。
- 3 現地調査は、平成9年2月9日から3月10日まで行った。また、整理作業は、現地調査終了後、平成11年3月25日まで、断続的に行った。
- 4 バックホーによる表土剥は、和農興の竹内和好に依頼して行った。
- 5 遺構実測の基準となる国家座標に基づくメッシュ杭打ち（3×3m）及び水準点（BM=480.107m）の設置は、株式会社ジャステック長野支店に委託して実施した。
- 6 遺構の実測はメッシュをもとに、簡易やり方により、池田育子、塩川美代子、塩沢むつきが行った。
- 7 遺物の洗浄・注記・接合・実測・拓本・観察、遺構及び遺物実測図のトレース、報告書作成は、中沢徳士、久保田敦子、望月貴弘、古野明子、須齋千恵子及び整理作業員が行った。なお、石器の材質鑑定は、市誌編さん室の甲田三男氏に依頼して行った。
- 8 遺構及び遺物写真は、中沢が撮影したものを使用した。
- 9 本調査に係る資料は、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。
- 10 本調査にあたり、国立長野病院、佐藤建設・東急建設・東信土建企業共同体、竹原重建の皆さんにご協力をいただいた。記して感謝する次第である。
- 11 本調査に係る調査の体制は次のとおりである。

教 育 長：我妻 忠夫

教 育 次 長：宮下 明彦

文 化 課 長：川 上 元

文化財係長：岡田 洋一 [平成10年4月30日退任] 細 川 修 [平成10年5月1日着任]

文化財係職員：中沢 徳士、尾見 智志、塩 崎 幸夫、久保田敦子、久保田 浩、西沢 和浩、
山 崎 敦子、清水 彰、小笠原正、望月 貴弘、古野 明子、松野ひろみ、
須齋千恵子

現場作業員：池田 育子、内山 重利、小林 哲三、塩川美代子、塩沢むつき、田中正美、
東山 唯夫、東山 恒子、村田 宣子、横沢 生枝、横 沢 昇（50音順）

整理作業員：饗場奈那江、池田 育子、井沢 光子、石合好江、大井 敬子、斉藤かな枝、
塩川美代子、塩沢むつき、田村まり子、丸田由紀子、山本 万里（50音順）

凡 例

遺 構

- 1 遺構は、次の（ ）内に示す略号で表し、続き番号は任意であり、欠番もある。
 竪穴住居址（S B-） 竪穴住居址内のピット（P） 土壌（SK-） ピット（P-）
- 2 遺構図版は、原則として国家座標に基づく北を頁の上にした。紙面の都合により例外もあるが、その場合は別途方位を示した。
- 3 遺構実測図は、原則として原図1/20、縮小1/3とした。さらに、詳細な実測が必要な場合は、原図1/10、縮小1/3とした。例外もあるが、各図の縮尺は、図中のスケールによりたい。
- 4 表記する遺構が、時代の新しい他の遺構や攪乱等によって破壊を受けたり、不明確な場合は、表記する遺構の推定プランを破線で示した。
- 5 遺構図中の「S」は、石を示す。
- 6 住居址の主軸方位は、国家座標の北と住居址の中軸線とのなす角度で示した。
- 7 遺構の規模や標高を示す単位は、すべて「m」である。
- 8 遺構図中の網点は、焼土を示す。
- 9 遺構写真図版の縮小は任意である。
- 10 遺構観察表の表記方法は、次のとおりである。

遺構	遺構略号	形態	平面形	壁 高 床 高	敷地面から床までの高さ 最大・最小(方向) 床の高 最高・最低 床の平面積 m ²	火 処	形態 位置 規模	炉・竈の別 長横×短横
	図版	階層略号	方位 規模					
柱穴	住居址に穿つ柱穴(長横×短横×高さ)							
備考								

遺 物

- 1 土器実測図は、原図1/1、縮小1/3とした。
- 2 土器の実測は四分画法を用い、左1/2に外面、右1/2に内面及び断面を示した。
- 3 土器の実測図中の濃い網点は黒色処理を、薄い網点は赤色塗彩を、断面図の網点は磁器を示す。
- 4 遺物観察表の標記方法は、次のとおりである。
 ①遺構No…出土遺構 ②図版No…掲載図版番号 ③器種…土器の形態種類 ④種類…土器の種類 ⑤法量…スケール、単位「cm」、推定の場合は○書き ⑥残存…残存比率 ⑦器質…「胎」胎土、「焼」焼成。「色」外内面の基本的色調=『新版標準土色観』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）による ⑧成形…成形技法 ⑨形態…プロポーシヨンの特徴 ⑩整形ほか…仕上げ技法と特記事項
- 5 石器の場合は、表中にその都度示した。
- 6 遺物写真図版の縮小は任意である。

目

本文目次

例言	
凡例	
目次	
第一章 序説	…… 1
1 調査に至る経過	…… 1
2 調査の方法	…… 1
3 調査の経過	…… 2
第二章 遺跡の環境	…… 3
1 自然的環境	…… 3
2 歴史的環境	…… 6
3 基本的順序	…… 7
第三章 調査の結果	…… 9
1 概要	…… 11
2 検出遺構	…… 12
3 出土遺物	…… 37
写真図版	…… 47
報告書抄録	

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	…… 5
第2表 SB-01観察表	…… 10
第3表 SB-02観察表	…… 11
第4表 SB-03観察表	…… 12
第5表 SB-04観察表	…… 13
第6表 SB-05観察表	…… 14
第7表 SB-06観察表	…… 16
第8表 SK観察表	…… 35
第9表 P観察表(1)	…… 35
第10表 P観察表(2)	…… 36
第11表 P観察表(3)	…… 37
第12表 出土遺物観察表(1)	…… 42
第13表 出土遺物観察表(2)	…… 43
第14表 出土遺物観察表(3)	…… 44
第15表 出土遺物観察表(4)	…… 45
第16表 出土遺物観察表(5)	…… 46

写真目次

PL1 SB-01, SB-02, SB-03	…… 47
PL2 SB-04, SB-04 竈, SB-05	…… 48
PL3 SB-06, P-16人骨出土状況, P-16 人骨	…… 49
PL4 SB-01-03出土遺物	…… 50
PL5 SB-03-05出土遺物	…… 51
PL6 SB-05, その他出土遺物、作業風景	…… 52
PL7 調査区全景	…… 53

次

図版目次

第1図 調査地位置図(1)	…… 4
第2図 周辺遺跡分布図	…… 8
第3図 調査地位置図(2)	…… 9
第4図 検出遺構全体図	…… 10
第5図 SB-01実測図	…… 11
第6図 SB-02実測図	…… 12
第7図 SB-03実測図	…… 13
第8図 SB-04実測図	…… 14
第9図 SB-05実測図(1)	…… 15
第10図 SB-05実測図(2)	…… 15
第11図 SB-06実測図(1)	…… 16
第12図 SB-06実測図(2)	…… 17
第13図 SK実測図(1)	…… 18
第14図 SK実測図(2)	…… 19
第15図 P実測図(区割図)	…… 20
第16図 P実測図(1)	…… 21
第17図 P実測図(2)	…… 22
第18図 P実測図(3)	…… 23
第19図 P実測図(4)	…… 24
第20図 P実測図(5)	…… 25
第21図 P実測図(6)	…… 26
第22図 P実測図(7)	…… 27
第23図 P実測図(8)	…… 28
第24図 P実測図(9)	…… 29
第25図 P実測図(10)	…… 30
第26図 P実測図(11)	…… 31
第27図 P実測図(12)	…… 32
第28図 P実測図(13)	…… 33
第29図 P実測図(14)	…… 34
第30図 P実測図(15)	…… 38
第31図 SB-01遺物実測図	…… 38
第32図 SB-02遺物実測図	…… 38
第33図 SB-03遺物実測図(1)	…… 39
第34図 SB-03遺物実測図(2)	…… 39
第35図 SB-04遺物実測図(1)	…… 40
第36図 SB-04遺物実測図(2)	…… 40
第37図 SB-05遺物実測図	…… 41
第38図 SB-06遺物実測図	…… 41
第39図 SK-07遺物実測図	…… 41
第40図 P-57遺物実測図	…… 41
第41図 P-16遺物実測図	…… 41
第42図 遺構外遺物実測図	…… 41

第一章 序説

1 調査に至る経過

平成6年の長野県職員住宅建設、同年の国立長野病院建設、及び平成8年の同病院看護婦宿舍建設事業、同年末から9年初頭の病院南道路拡幅工事等に伴う4回の発掘調査は、病院敷地周辺に所在する八幡裏遺跡が、縄文時代中～後期と古墳時代後期～奈良・平安時代の集落遺跡であることを知らしめた。特に、縄文時代の敷石住居10件、人骨を伴う墓壇3件の検出、住居址からのイノシシ・シカの獣骨の出土は、太郎山山麓扇状地の該期の遺跡について、新たな指標を示した。（「八幡裏遺跡Ⅱ」1997年、「八幡裏遺跡Ⅲ」1998年いずれも上田市教育委員会）また、平成8年度の冬に行った第Ⅳ次発掘調査では、古墳時代の集落址の一端が、比較的良好な状態で確認されている。

こうした調査を経て、平成10年1月8日、上田市役所本庁舎5階第三委員会室において、厚生省関東信越地方医務局、国立長野病院、上田市、上田市教育委員会、上田市土地開発公社の5者事務担当者により、国立長野病院北側駐車場造成にむけた遺跡調査に係る調整会議が開催され、今回の発掘調査について協議した。

該当地区は、これに先立つ平成9年10月に試掘調査を実施しており、その際、遺構が現地表面下0.7m前後に確認され、それとともに、土師器片を少量出土した（「市内遺跡Ⅵ」1998年上田市教育委員会）。これにより、遺跡の保護措置の必要性は確認されており、協議の結果、駐車場造成部分約1,200㎡の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとした。現地調査は、平成9年2月中に行い、調査報告書については平成10年度に刊行することとした。

2 調査の方法

(1) 遺跡名の取扱いと遺跡記号

遺跡名は「八幡裏遺跡」とした。これは『長野県市町村遺跡分布図』（昭和52年長野県教育委員会）、『上田市文化財分布地図』（昭和54年上田市教育委員会）、『全国遺跡地図 長野県』（昭和58年文化庁文化財保護部）、『長野県史』（長野県史刊行会）記載の「八幡遺跡」と同一であるが、過去の調査の経過から、名称は「八幡裏遺跡」に統一した。

また、記録の便宜を図るため遺跡記号として、Hachi-Man-Uraの頭文字を組み合わせて「HMU」とし、第5次調査を示す「V」をつけ、「HMU-V」とした。各種の記録や遺物の注記にあたっては、この略記号を用いた。

(2) 調査範囲の設定と掘り上げ

調査範囲は駐車場敷地部分に設定した。おおまかな表土の除去はバックホーにより行い、その後の遺構検出や遺構の掘り上げは、すべて人力で行った。

(3) 遺構記録の方法

調査地区には国家座標に基づく3×3mのメッシュをはり、メッシュの交点に記号を与えグリッド番号とした。この記号は、基準点を0とし、方向を示すために東・西・南・北にE・W

・S・Nを、距離を表すため、3mを一単位として1・2・3・4…を与え、この両者の組み合わせによって表した。例えば、基準点0から北に96m、東に57mのメッシュの交点は、N32E19となる。遺構平面測量は、このメッシュによる簡易やり方によって行っている。グリッドはメッシュの交点を北東とする記号で表し、遺構外出土遺物に関してはこのグリッドによって取り上げた。

なお、基準点0の座標値は、国家座標第Ⅷ量系 X=45,468,000、Y=-22,074,000であり、本遺跡の調査については、共通させている。

3 調査の経過

平成10年（1998）

- 2/9 現地調査着手。バックホーによる表土剥ぎとともに、調査員が遺構検出を行う。
 - 2/10 バックホーによる表土剥ぎを行う。試掘調査の結果により想定されていた以上に遺構の密度が濃く、全面的に広がっていることが確認される。
 - 2/12 引き続きバックホーによる表土剥ぎを行う。排土置き場に苦慮する。
 - 2/16 バックホーによる表土剥ぎと遺構検出を行う。桑の抜根による攪乱が、調査区域全面に畝状に入っている。
 - 2/17 作業員が参加し、遺構検出と遺構の掘り上げを行う。雪解けによる泥寧で作業効率がいちじるしく悪い。
 - 2/18 バックホーによる表土剥ぎを終了する。引き続き遺構検出、掘り上げを行う。
 - 2/19 ブドウ棚のアンカー埋設と桑の抜根による攪乱を除去する。
 - 2/20 引き続き攪乱を除去するとともに遺構の掘り上げ、実測を行う。
 - 2/24 P-16から人間の頭骨が出土する。
 - 2/26 P-16の頭骨の下から古銭が出土する。
 - 2/27 SB-06掘り上げ。覆土内から炭化物が大量に出土する。
 - 3/3 SB-05完掘。
 - 3/5 SB-01・SB-02・SB-03・SB-06完掘。SB-03は西壁と南壁がほとんど削平されている。SB-01は弥生期の住居跡で、本遺跡でははじめての弥生期遺構の確認となる。
 - 3/6 全遺構の掘り上げ終了。
- 以降、3月10日まで実測を行い、すべての現地調査を終了する。

整理作業及び報告書作成作業は、現場作業終了直後から平成11年3月まで断続的に行い、平成11年3月25日、本報告書を刊行して、すべての調査事業を終了した。

第二章 遺跡の環境

1 自然的環境

八幡裏遺跡のある上田盆地は長野県の東部に位置し、盆地中央を南東から北西に貫く千曲川によって右岸と左岸に隔てられる。この内、八幡裏遺跡のある右岸は、北方を太郎山山地に、東方を烏帽子火山群の寄生火山である殿城山に遮られ、千曲川を底辺とする三角形に展開している。平野部は千曲川によって形成された第Ⅰ～Ⅲ段丘面と沖積氾濫原で、上田市街地は主に第Ⅱ～Ⅲ段丘面から沖積氾濫原にかけて広がっている。

遺跡の北にそびえる太郎山山地は、中央部の黄金沢の谷によって太郎山(1,164m)と最高峰の東太郎山(1,300m)とに隔てられる。太郎山の西方には岩礫地特有の植生がみられる虚空蔵山(1,076m)があり、その南斜面は急峻な岩肌を見せている。それに対し、東太郎山から続く東方の山並みは穏やかで、その東端には上野と呼ばれる丘陵台地が伸び、北方の菅平高原に源を発する神川によって断ち切られている。この台地は烏帽子火山群から流出した溶岩台地で、神川左岸と地質的には同質であり、もとは一続きのものである。

遺跡が所在する太郎山山地の南麓にはいくつかの河谷が数えられ、その谷の出口には扇状地や崖錐地形が発達している。この内最も大規模なものは黄金沢の扇状地で、その扇頂部に山口という谷集落があり、扇状地は一面リング園となっている。この扇状地の南縁は矢出沢川に断ち切られるが、西側は千曲川の第Ⅱ段丘面まで広がり、虚空蔵沢の出口にまで及んでいる。この辺りは黄金沢の伏流水が湧水となって湧き出している。この扇状地の西方では、太郎山が直接段丘面に接し、虚空蔵沢や声沢などの小渓谷の出口に崖錐地形が形成されている。

千曲川右岸の山地は第三系の内村層・別所層などで構成されており、遺跡は内村層に接している。内村層の分布は上田市北方から真田町、坂城町、更埴市、長野市松代町、須坂市東方にまで及ぶ。上田市北方の内村層は、下位から大峰山層・太郎山層・横尾層に区分される。大峰山層は、主に黒色泥岩からなり、まれに安山岩質で緑色の火山岩層や砂岩層を挟む。層厚は800m以上ある。太郎山層は大峰山層を整合に覆い、デイサイト質で緑色の凝灰角礫岩からなり、層厚は600mを計る。太郎山層には黄鉄鉱が多く含まれており、黄金沢の名の由来となっている。また、上田城の石垣は太郎山産の緑色凝灰岩を使用している。横尾層は、火砕岩と黒色泥岩からなる。なお、この地では、変質作用が認められ、大峰山層・太郎山層下部は曹長石・石英・緑泥岩の組み合わせであり、太郎山層上部から横尾層は、曹長石・緑泥石質雲母の組み合わせである。

平地に分布する第四系は下位から、虚空蔵山層・染屋層・上田泥流堆積物・河岸段丘堆積物・扇状地堆積物に区分される。遺跡は虚空蔵山層に染屋層上層部と扇状地堆積物が重なる地域である。虚空蔵山層は第四系の最下層で、岩清水台地・太郎山の麓にあたる斜面を形成する。太郎山山地では、おもに内村層の緑色凝灰岩の角礫からなる礫層で、北方の太郎山に由来する。染屋層は、上田市街地の地下に分布する湖成層で、その上層部は礫層を主体とし、砂礫を数枚挟む層厚0.1～0.5mの河川堆積物である。安山岩礫のほか、新第三系の緑色凝灰岩、石英ひん岩の礫を多く含む。扇状地堆積物は、新第三系の緑色凝灰岩からなる。



第 2 図 周辺遺跡分布図

番 号	遺 跡 名	時 代	遺 跡 の 所 在 地	備 考
5 2	染谷台条里水田跡遺跡	弥生～平安	上野・住吉・古里・国分	85年～数次調査
5 3	向田古墳	古墳	古里字向田1861	半壊
5 4	国分遺跡群	弥生～平安	国分字古城堂浦屋敷	97年調査
5 6	国分寺周辺遺跡群	縄文～平安	国分寺字仁王堂明神前他	94年県埋文調査
5 7	常入遺跡群	縄文～平安	常入字堀の内・中常田他	96年調査
5 8	金井裏遺跡	縄文～平安	上田字金井裏蟹原	85・96年調査
5 9	東奥山原遺跡	弥生・平安	上田字東奥山原	
6 0	二子塚古墳	古墳	上田字秋葉裏	
6 1	大星西遺跡	縄文・古墳	上田字大星	
6 2	雁驅遺跡	弥生・平安	上田字雁堀	
6 3	西丘遺跡	平安	上田字西丘	
6 4	八幡裏遺跡	縄文・平安	上田字愚川・大星前他	94年～V次調査
6 5	海野遺跡	弥生・平安	上田字海野	
6 6	上田城跡	近世	上田字二の丸	
6 7	上平遺跡	縄文～平安	常磐城字上平	
6 8	殿田遺跡	平安	常磐城字横畑・仁王田	
9 2	上平古墳	古墳	諏訪形字上平	
9 3	森の木1号古墳	古墳	諏訪形字森の木	
9 4	森の木2号古墳	古墳	諏訪形字森の木	
9 5	渋取田遺跡	縄文	諏訪形字渋取田・中堰	
9 6	中沢遺跡	平安	諏訪形字中沢	
4 1 4	小原曲輪城跡	近世	上田字上田城廻り	
4 1 5	牛伏城跡	近世	常磐城字虚空蔵	
4 1 6	アラ城跡	近世	常磐城字太郎山	
4 1 7	北林城跡	近世	常磐城字上平	
4 3 9	豊原古墳	古墳	上田字豊原	
4 5 6	花古屋城跡	近世	上田字花古屋	
4 5 7	染屋城跡	近世	古里字英	

第1表 周辺遺跡一覧表

2 歴史的環境

太郎山山地の南麓、黄金沢扇状地から西方の千曲川第Ⅱ段丘面にある秋和付近までの一帯を概観すると、濃密な遺跡分布が見られる。以下、時代に沿って遺跡の在り方を追ひ、当遺跡を取り巻く歴史的環境を見ていく。

縄文時代の遺跡では、当遺跡の調査の発端となった、思川遺跡があげられる。思川遺跡は、昭和27年に五十嵐幹雄氏が、病院の改築工事中に見発・調査したものであり、今回調査した遺跡の西端にあたる。調査結果は北上田遺跡として報告され、明確な遺構は確認できなかったものの、中期加曾利E式、後期堀之内式、加曾利B式などの土器、磨製石斧・打製石斧などとともに、イノシシ・ニホンジカなどの獣骨も出土している（『信濃』第9巻第11号 昭和32年）。また、平成6年の新病院建設に伴う八幡裏遺跡の第Ⅱ次調査では、中期後葉から後期中葉の敷石住居址が7件確認されたほか、墓塚が3件確認され、屈葬位の人骨が出土している。また、これら住居址や土壌からは、イノシシ・ニホンジカの骨も出土した。このほか、今回調査区北西の大星西遺跡でも加曾利E式土器片が表採されている。また、太郎山南斜面の山腹のテラス状台地に位置する上平遺跡からはかつて、中期加曾利E式土器が表採されている。

弥生時代の遺跡は、後期箱清水式期にほぼ限られる。中期以前の遺跡はほとんど皆無に等しく、八幡裏遺跡南端の上田交通北東線（宛線）敷設工事の際、中期栗林Ⅱ式期の壺形土器2個体が発見されているのみである。後期箱清水式期には前述の上平遺跡の住居址から土器セットが出土したほか、昭和60年の上田バイパス建設に伴う金井裏遺跡第Ⅰ次発掘調査、平成10年の宮原遺跡発掘調査でも、住居址から比較的良好な同時期の土器セットが出土している。

古墳時代、当地域には多くの古墳が築造されている。秋和地区北西の秋和郷原野神社境内にある秋和大蔵京古墳（上田市指定文化財）は、昭和59年、筑波大学の常木晃・望月保宏氏らの実測調査により、基底部の一辺が32～35m、高さは5～8mの方墳と計られ、墳丘上から採取された古式土器器片から、築造は4世紀末から5世紀前半に比定されている（「上田八幡大蔵京古墳の実測調査」『信濃』第38巻第4号信濃史学会）。また、秋和大蔵京古墳の南西に位置する風呂川古墳は、平成4年の新幹線工事用道路開削の際に、鮎長野県埋蔵文化財センターによって周溝の一部（山側）が調査され、5世紀前半の方墳の可能性が指摘された（「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 2」1998 鮎長野県埋蔵文化財センター）。八幡裏遺跡の東方に隣接する二子塚古墳（上田市指定文化財）は、東信地方では数少ない前方後円墳で、全長約51m、前方部最大幅約25m、後円部最大幅約39m、高さ5～6mを計る。北側には周溝の一部と推定される窪みが残る。従来は6世紀前半の築造とされていたが、墳丘裾から採取された円筒埴輪片によって、更にさかのぼることが分かっている。後期古墳では、昭和62年に、下水道工事中に偶然発見され、調査された豊原古墳がある。この古墳からは、5体の人骨と太刀5口、刀装具、鉄鍔、鉄製品や金環、ガラス小玉などが出土した。また、前述の風呂川古墳のある秋和・塩尻地区にはかつて、6基の古墳が確認されていたが、そのほとんどが破壊され、わずかに虚空蔵山中腹（標高620m）の弥陀平古墳1基が残るだけである。

同時期の集落址については、本遺跡南西部で、平成9年に新病院南口道路建設に伴い発掘調査した八幡裏遺跡第Ⅳ次調査で、後期の住居址が数件確認されたほか、やはり同遺跡北東部の第Ⅰ

次調査で後期の住居址が1件確認されている。このほか、前述の金井裏遺跡の第1次調査においては前期の住居址が、平成8年の同遺跡第2次調査では後期の住居址が確認されており、従来、古墳の数に比して、あまりよく判っていなかった集落の実態が解明されつつある。

奈良・平安時代の遺構としては、本遺跡の第2次調査において、平安時代の住居址が13件確認されたほか、前述の第4次調査においても数件確認されている。このほか、昭和60年に上田パイパス建設工事に伴い調査された殿田遺跡では、奈良・平安期の住居址が5件が検出されたほか、前述の上平遺跡の調査では、奈良時代の須恵器窯が確認されている。

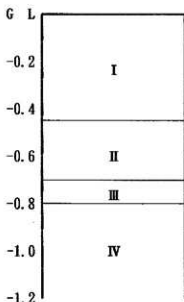
中世以降の集落については不明であるが、太郎山中腹には尾根ごとに山城・砦が構えられ、その段郭が残っている。昭和の前半まで一帯は、「蚕都うえだ」の繁栄を支えた桑園や、果樹園が広がっていたが、蚕糸業の衰退とともに住宅地化し、上田市でも良質な住宅地となっている。

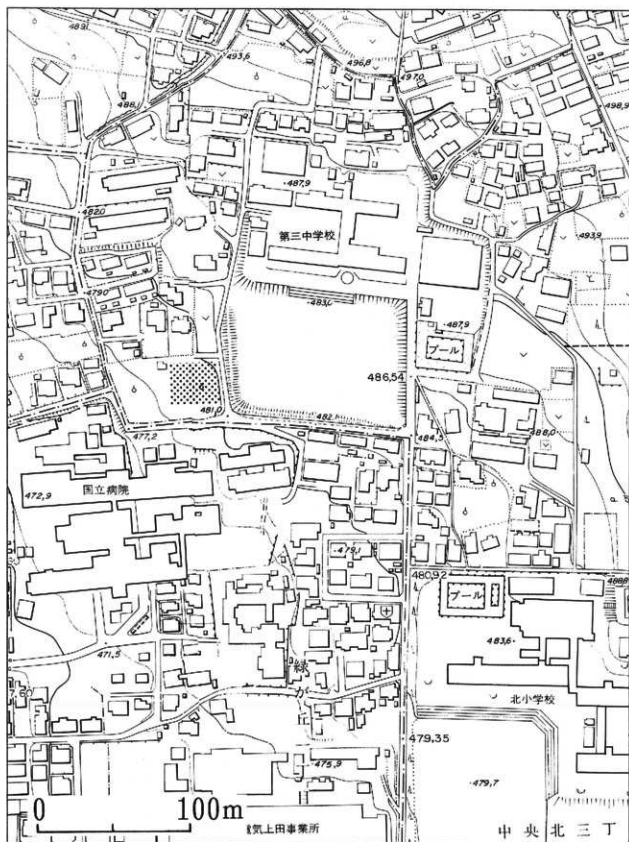
3 基本的層序

自然的環境でも述べたとおり、調査地は太郎山に発する黄金沢の扇状地の端に位置し、角礫を多く含む砂礫土層が主体の土地である。

調査地における土層は、おおむね4層に分類でき、表土の第I層はぶどう畑の耕作土で、3cm大の礫が混じるにふい褐色を呈した軽埴土である。第II層は扇状地堆積物の土層で、10cm大の亜角礫を主体とする褐灰色の壤土である。第III層は遺構検出面で、にふい黄褐色を呈する礫の少ない砂質土である。第IV層は黒褐色で礫が主体の砂礫土となる。

土層の厚・薄の差はあるが、本遺跡の従前の調査と基本的な層序は同じである。





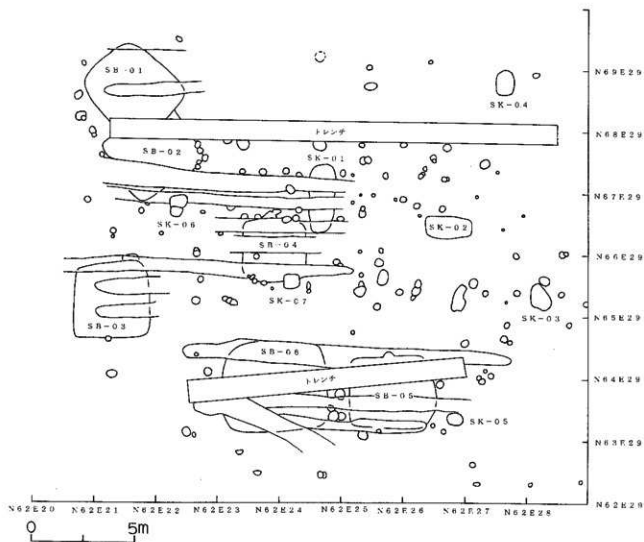
第 3 図 調査位置図 (2)

第三章 調査の結果

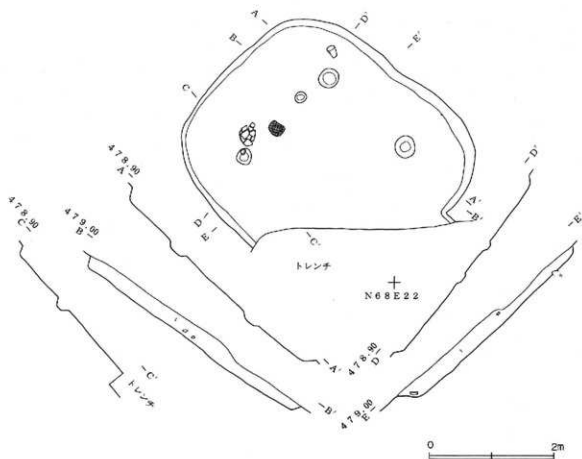
概要

本遺跡は、1998年の第IV次調査までの結果、縄文時代中～後期の集落址を中心に、古墳後期～平安時代の集落址が一回り大きく覆う形で存在する遺跡と考えられた。弥生時代の遺物としては、遺跡の南辺で中期の土器が発見させていただき（本編歴史的環境参照）であったが、今回の調査で、弥生時代後期の住居址(SB-01)が検出され、遺跡の時代の再考を迫られた。このほかの住居址からは、中世の住居址SB-02と、平安前～中期のSB-03、04、05が検出された。SB-06からは、多量の炭化材とともに少量の土師・須恵器・青磁片が出土したが、図示し得る遺物は磁石の1点だけで、時期の比定は困難である。

今回の調査区域は、従来の遺跡分布図では、北端部と考えられていたが、遺構の密度や、周辺地形の状況を鑑みるに、さらに北に広がる可能性がある。



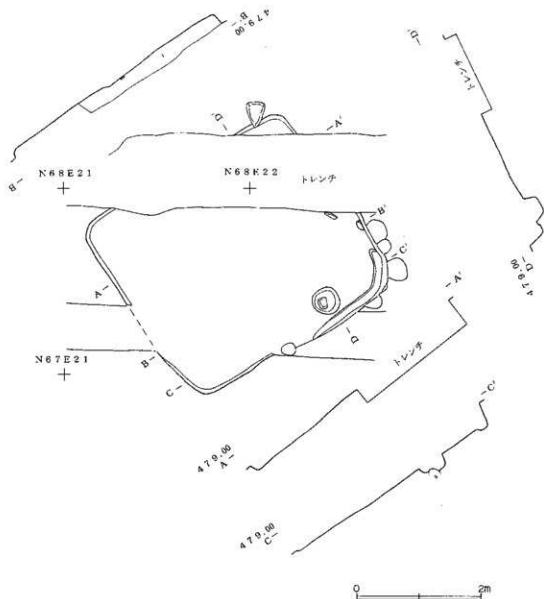
第 4 図 検出遺構全体図



第 5 図 SB-01 実測図

遺構	SB-01	形態	隅丸長方形	壁高	0.18(N)~0.10(S)	火	形態	炉
図版	第 5 図	方位	N-45°-E	床高	478.66~478.54	位置	北西柱穴間	
		規模	4.02×3.66	床面積	(13.08㎡)	処	規模	0.24×0.20
柱穴	P1(0.26×0.20×0.09)・P2(0.19×0.19×0.03)・P3(0.32×0.30×0.06)・P4(0.34×0.32×0.09)							
備考	トレンチのため南隅は不明。SB-02、散跡(3本)に切られる。床はやや堅い地山床。P1、P3、P4は主柱穴。P2は別遺構の可能性もある。炉は浅く掘り窪めた地床炉で、よく焼けている。覆土は7.5YR3/2黒褐色土で、小礫と黄褐色ロームを少量含む。床面より弥生壺1点、弥生高坏(脚部)1点出土。							

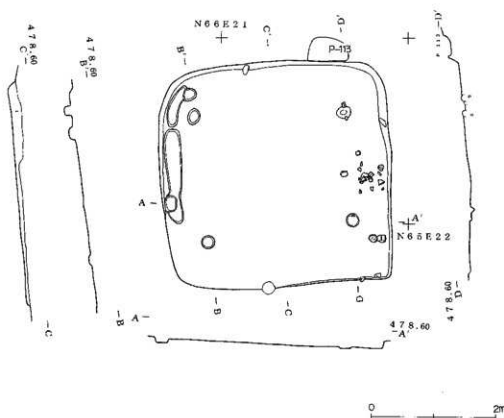
第 2 表 SB-01 観察表



第 6 図 SB-02 実測図

遺構	SB-02	形態	隅丸長方形	壁高	0.32(E)~0.04(S)	火	形態	不明
図版	第 6 図	方位	N-31'-W	床高	478.67~478.55	処	位置	
		規模	3.76x3.39	床面積	(11.86㎡)		規模	
柱穴	P1(0.44x0.44x0.12)							
備考	トレンチのため北半は不明。SB-01を切る。P-10、P-11、P-12、P-13、P-14、P-129、畝跡(4本)に切られる。主柱穴なし。P1は同時期の遺構ではない可能性もある。床はやや堅い地山床。土器の年代から確の存在が想定され、北東壁または北西壁に構築されていたと思われる。周溝は確認に欠ける。覆土は7.5YR3/2黒褐色土で、小礫と炭化物を少量含む。覆土中よりカワラケ2点、砥石1点が出土。							

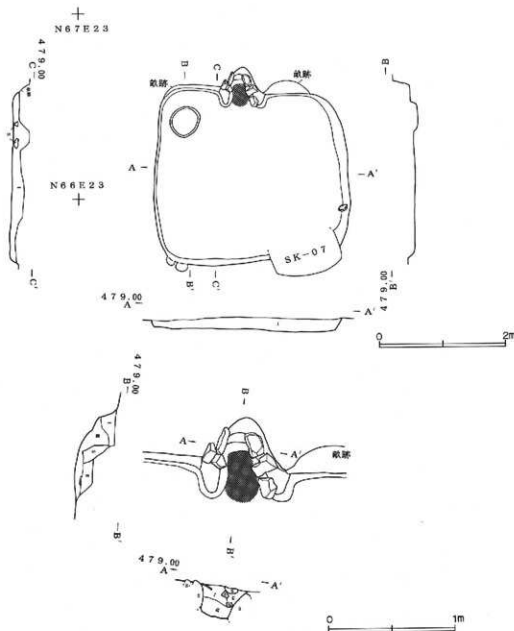
第 3 表 SB-02 観察表



第 7 図 SB-03 実測図

遺構	SB-03	形態	隅丸方形	壁高	0.16(N)~0.00(W)	火	形態	竈	東壁中央
図版	第 7 図	方位	N-2°-W	床高	478.36~478.25	処	位置	規模	(0.65x0.63)
		規模	3.62x3.70	床面積	11.79㎡				
柱穴	P1(0.25x0.20x0.08)・P2(0.22x0.20x0.06)・P3(0.21x0.20x0.04)・P4(0.22x0.21x0.09) P5(0.24x0.20x0.11)								
備考	P-24、P-113、畝跡(3本)に切られる。床は柔らかい地山床で、南西側はほとんど削平される。竈は僅かに火床が認められる程度。P1、P2、P3、P4は位置的に主柱穴と思われるが、非常に浅い。周溝は確証に欠ける。覆土は7.5YR4/4褐色土で小礫と砂利を含む。床面上に土師環2点、覆土中より土師環1点、竈内より土師環1点、土師高台付皿1点、須恵四耳壺片(1個体分)が出土。								

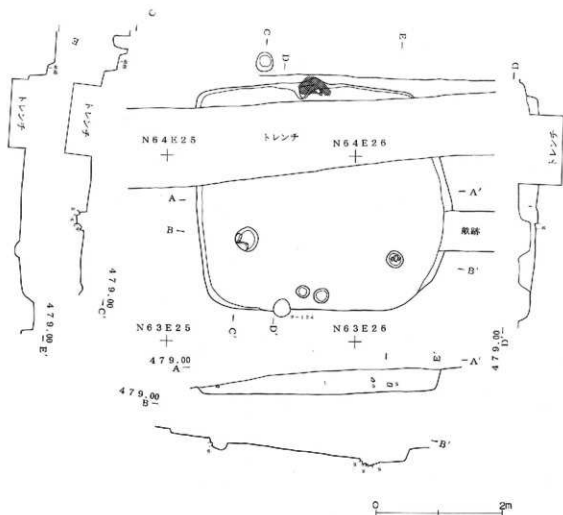
第 4 表 SB-03 観察表



第 8 図 SB-04 実測図

遺構	SB-04	形態 方位	隅丸方形 N-5°-E	壁高 床高	0.26(N)~0.11(S) 478.68~478.59	火 処	形態 位置	竈 北壁中央
図版	第 8 図	規模	3.12x2.90	床面積	7.00㎡		規模	0.70x0.68
柱穴	PI(0.50x0.44x0.10)							
備考	SK-07、P-36、P-37、P-40、P-41、P-74、P-114、畝跡(3本)に切られる。床はやや堅い地山床。竈は住居外に張り出し、角礫を3対ずつ並べて芯材とし(ただし西袖は2個のみ残存)、構築粘土が僅かに残存する。覆土は7.5YR4/4褐色土で、砂利を多量に含む。覆土中より土師環2点、土師甕1点、磨製石斧1点、竈内より土師環3点、土師甕2点が出土。磨製石斧は混入と思われる。							

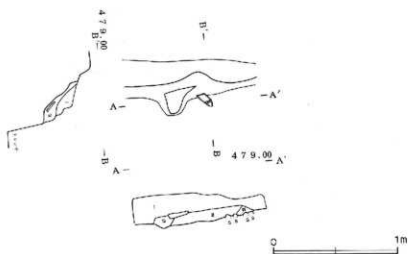
第 5 表 SB-04 観察表



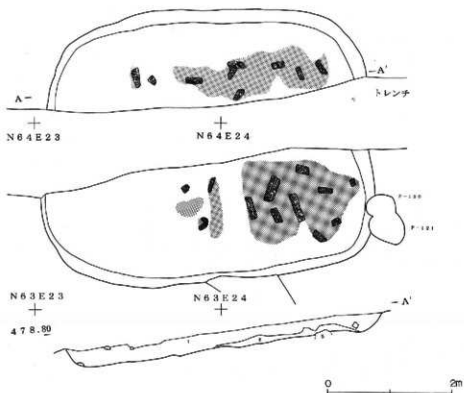
第 9 図 SB-05 実測図 (1)

遺構	SB-05	形態 方位	隅丸方形 N-7°-W	壁高 床高 床面積	0.32(E)~0.09(W) 478.64~478.51 (12.71㎡)	火 処	形態 位置 規模	竈 北壁中央 (0.63x0.34)
図版	第9・10冊	規模	3.90x3.68					
柱穴	P1(0.41x0.34x0.16)・P2(0.28x0.27x0.09)・P3(0.21x0.19x0.09)・P4(0.24x0.23x0.05)							
備考	北半はトレンチのため不明。P-123、P-124、竈跡(3本)に切られる。床は堅い地山床。竈は煙道(?)部が僅かに残存し、壁面はよく焼けている。東壁は弧状に湾曲する。P1、P2は位置的に主柱穴と思われる。P3、P4は別遺構の可能性もある。覆土は7.5YR3/3暗褐色土で、小礫を含む。覆土より土師環2点、須恵環1点が出土。							

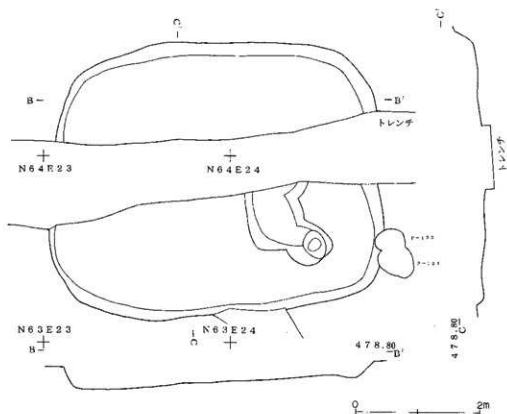
第 6 表 SB-05 観察表



第 10 図 SB-05 実測図 (2)



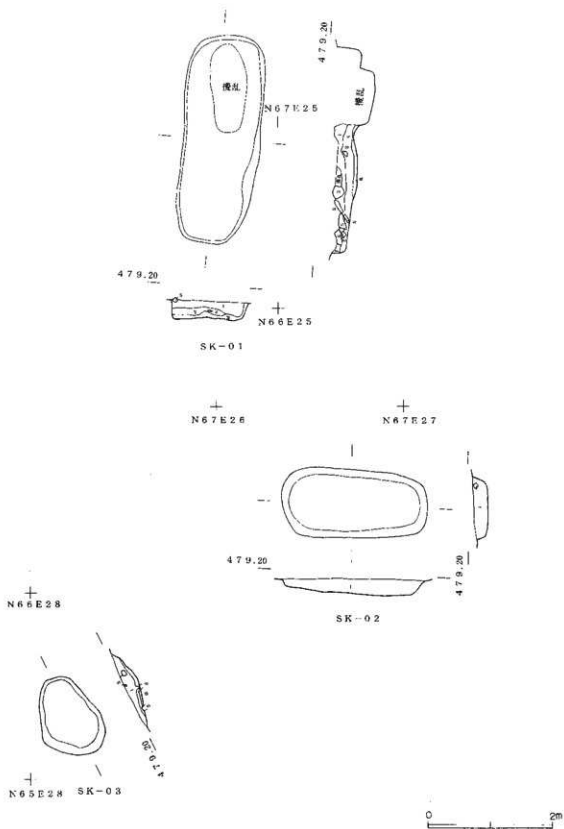
第 11 図 SB-06 実測図 (1)



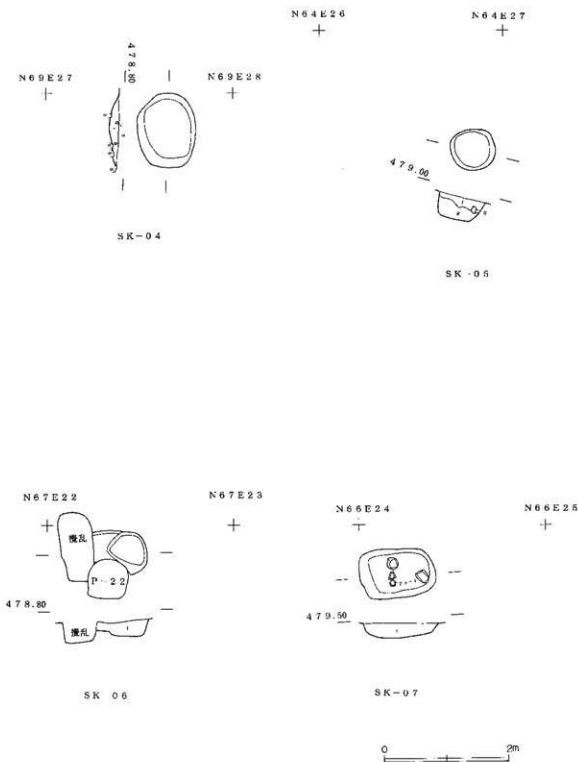
第 12 図 SB-06 実測図 (2)

遺構	SB-06	形態 方位	隅丸方形 N-4°-W	壁高 床高	0.34(W)~0.28(N) 478.43~478.18	火 処	形態 位置 規模	不 明
図版	第11・12冊	規模	5.35x4.32	床面積	(18.09㎡)			
柱穴	なし							
備考	中央部はトレンチのため不明。全体的に畝跡に切られる。床は柔らかい地山床で、高低差が激しい。覆土は7.5YR3/3暗褐色土で、砂利~拳大の礫を少量と、焼土粒と炭化物を多量に含む。床上に炭化材が散乱する。火処も不明で、住居址ではない可能性もある。遺物は非常に少なく、覆土より砥石が出土しているほかは土師器片・須恵器片数点が出土しているに過ぎない。							

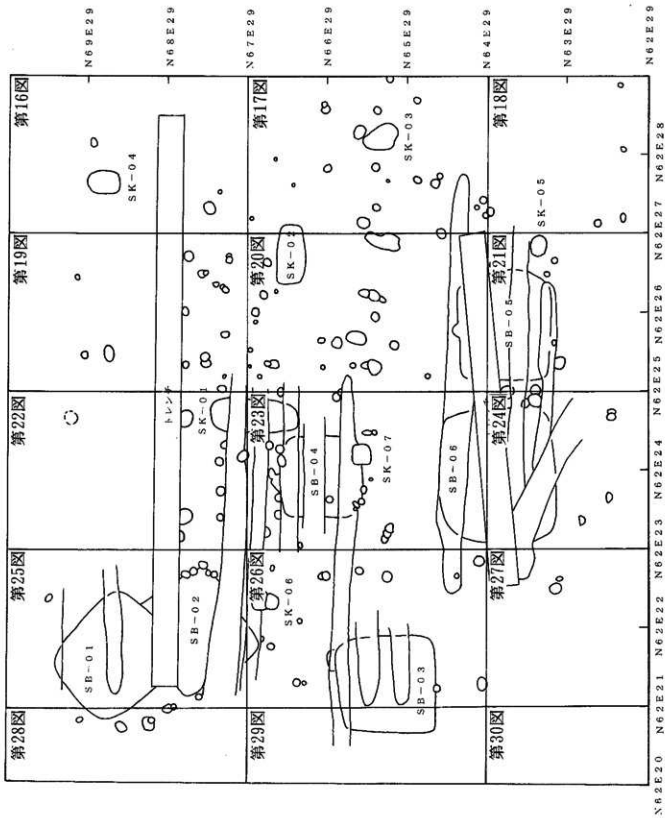
第 7 表 SB-06 観察表



第 13 图 SK 实测图 (1)



第 14 図 SK実測図 (2)



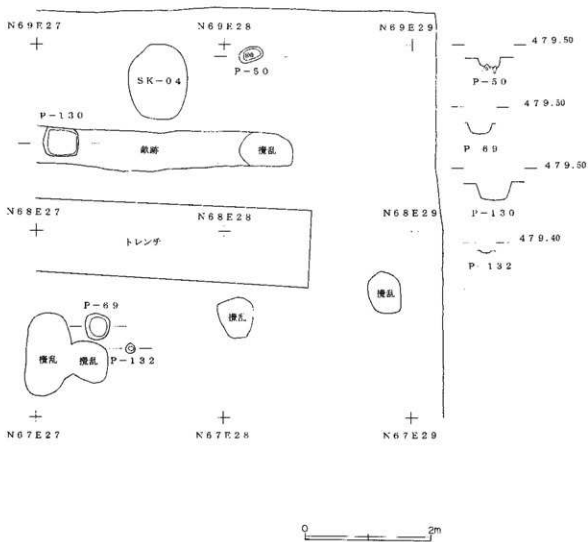
第15図 P実測図(区割図)

N70E27
+

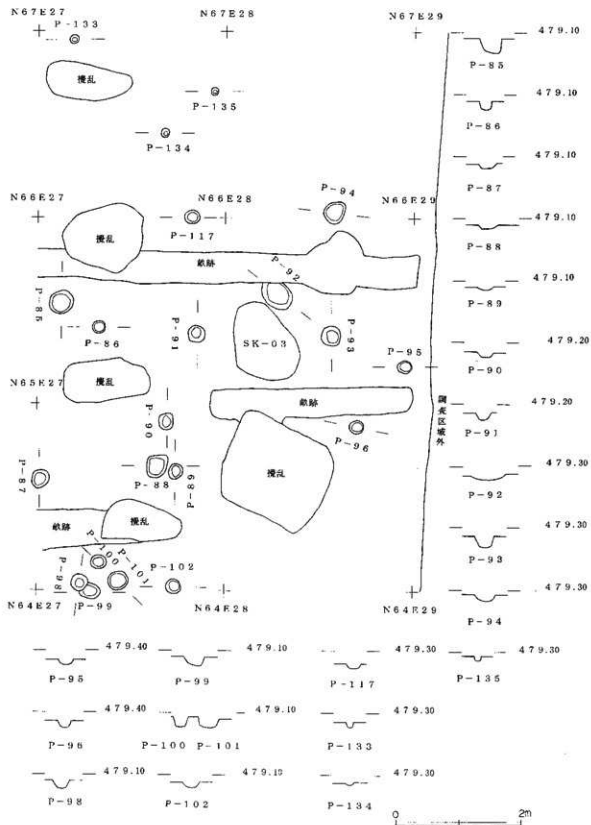
N70E28
+

N70E29
|

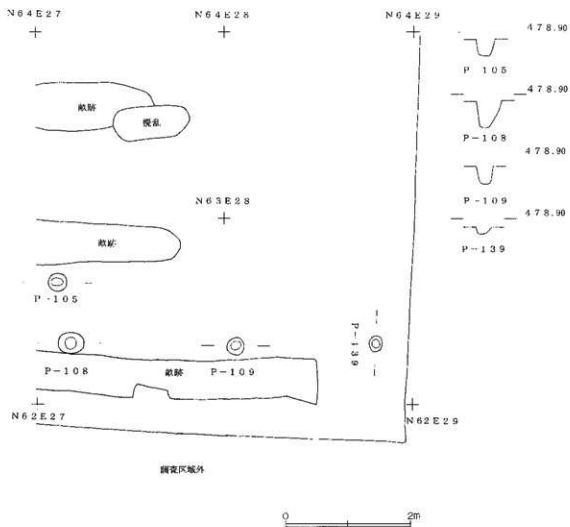
調査区域外



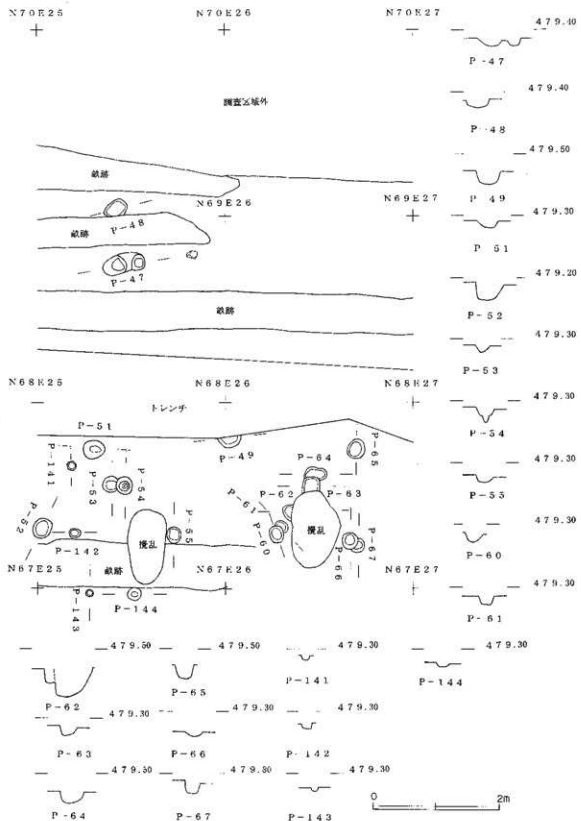
第 16 図 P 実測図 (1)



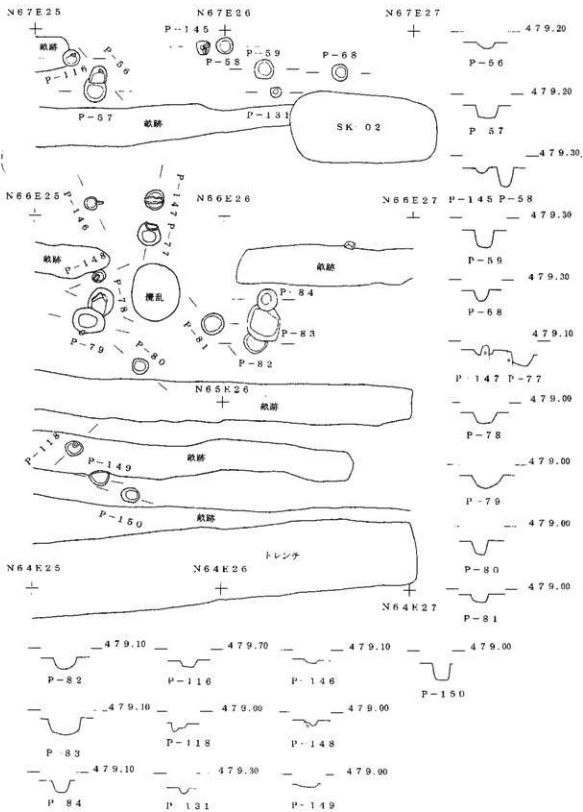
第 17 图 P 实测图 (2)



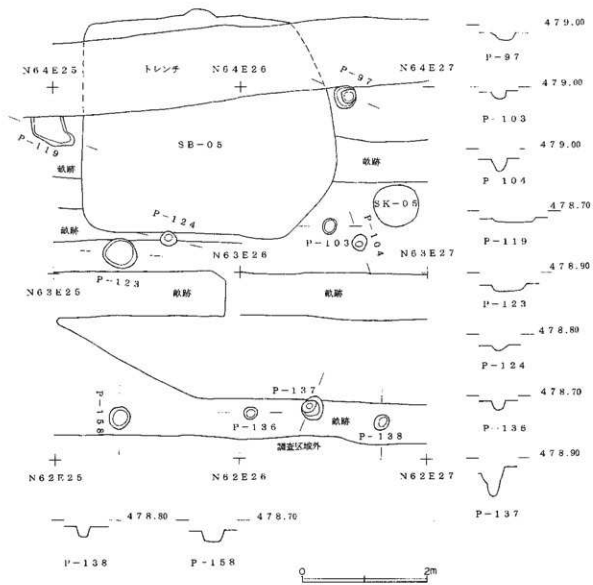
第 18 圖 P 実測図 (3)



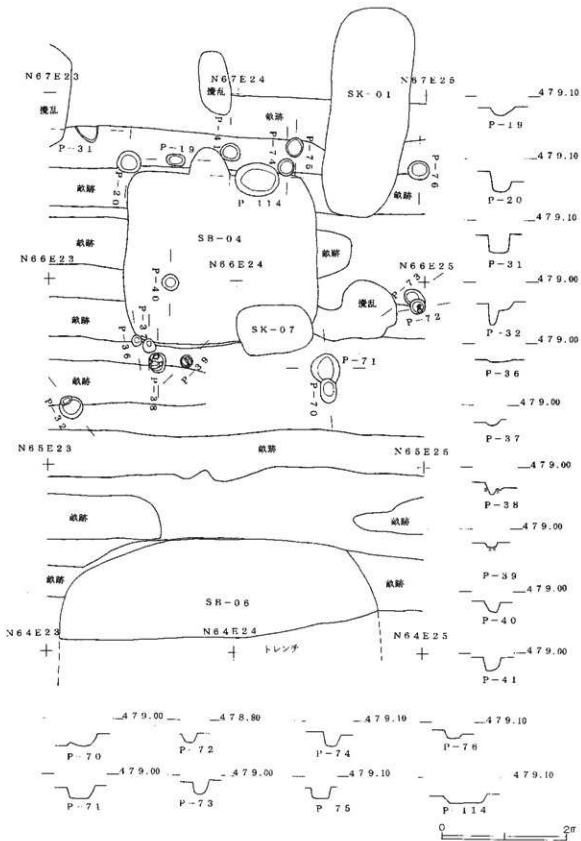
第 19 図 P 実測図 (4)



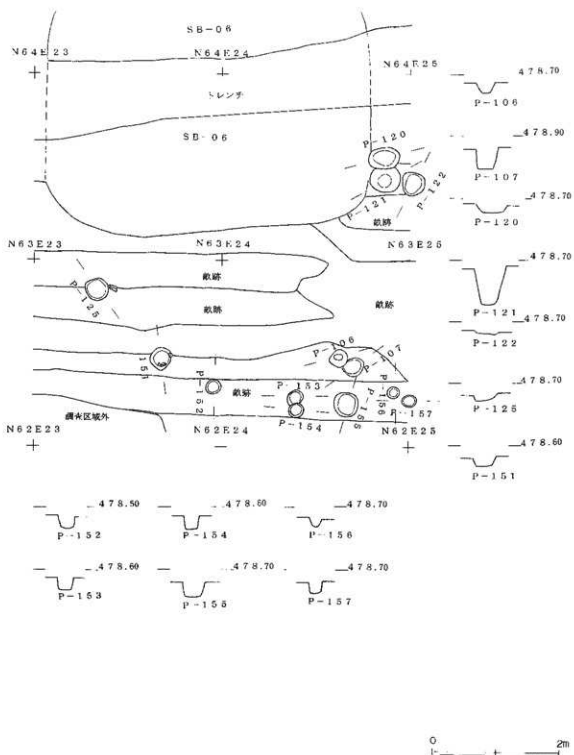
第 20 図 P 実測図 (5)



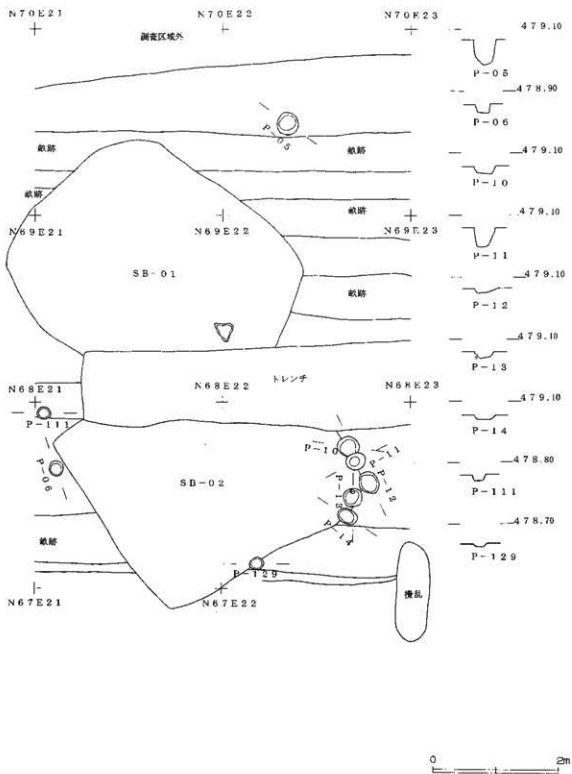
第 21 図 P 実測図 (6)



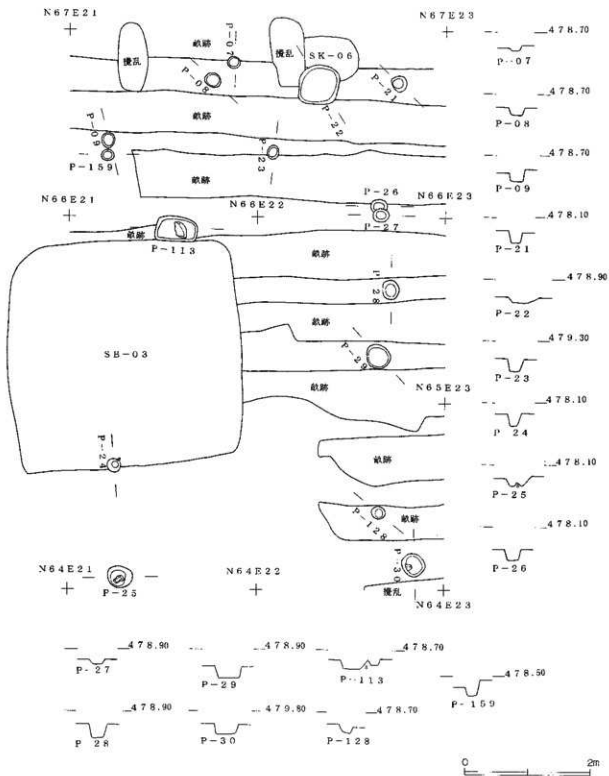
第 23 図 P 実測図 (8)



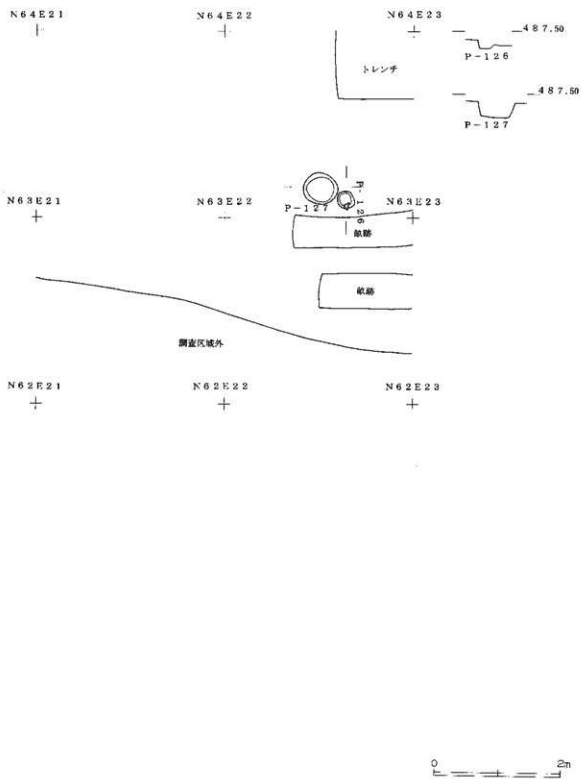
第 24 図 P 実測図 (9)



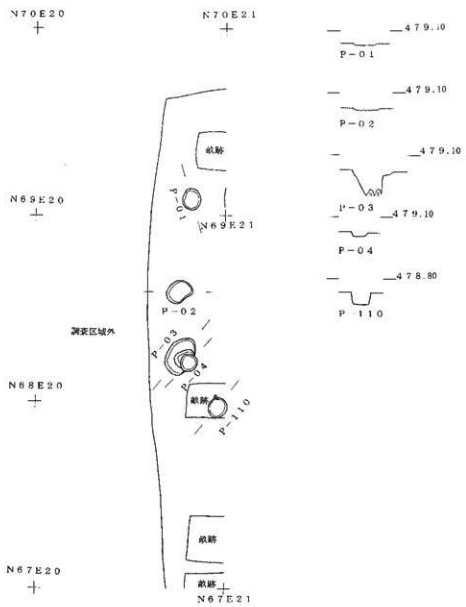
第 25 図 P 実測図 (10)



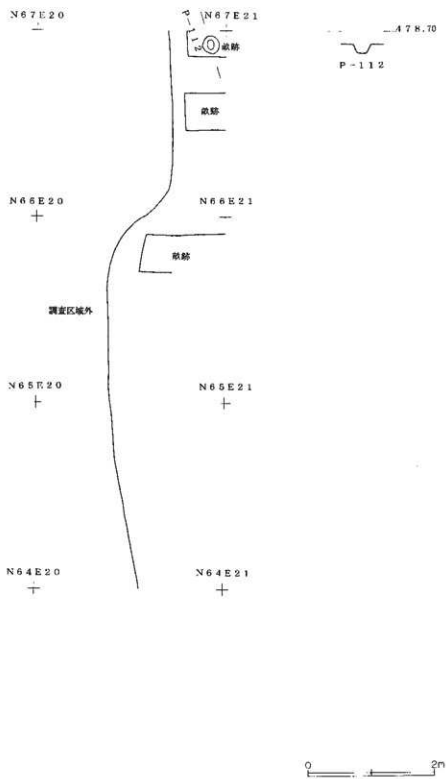
第 26 图 P 实测图 (11)



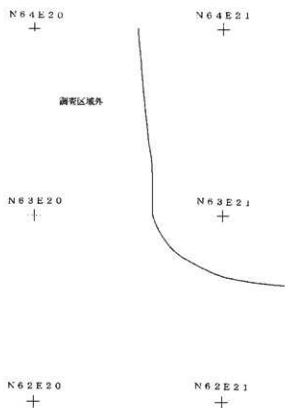
第 27 図 P 実測図 (12)



第 28 図 P 実測図 (13)



第 29 図 P 実測図 (14)



第 30 図 P 実測図 (15)

番号	図版	長径	短径	深さ	備 考(始・趾端)	番号	図版	長径	短径	深さ	備 考(始・趾端)
01	13図	336	122	33	観察用	05	14図	92	66	38	採新
02	13図	232	108	27		06	14図	186	(46)	28	P-22本筋・観察用
03	13図	134	89	22	採新	07	14図	120	78	15	SB-04枝系・採新
04	14図	220	93	27							

第 8 表 S K 観 察 表

番号	図版	長径	短径	深さ	備 考(始・趾端)	番号	図版	長径	短径	深さ	備 考(始・趾端)
01	20図	36	28	4		29	26図	42	34	20	
02	28図	42	31	5		30	26図	37	34	17	
03	28図	65	49	41	P-04本筋	31	23図	32	25	28	
04	28図	28	25	8	P-03枝系	32	23図	38	37	38	
05	25図	35	34	41		33					燻
06	25図	24	23	16		34					燻
07	26図	10	10	9		35					燻
08	26図	26	22	15		36	23図	18	15	6	SB-04枝系
09	26図	24	10	19		37	23図	23	20	11	SB-04枝系
10	25図	34	31	13	SB-02枝系・P-11本筋	38	23図	32	24	20	
11	25図	32	27	31	SB-02・P-10枝系	39	23図	20	19	8	
12	25図	38	30	9	SB-02枝系	40	23図	26	25	19	SB-04枝系
13	25図	29	29	10	SB-02枝系	41	23図	31	27	20	SB-04枝系・採新
14	25図	33	24	7	SB-02枝系	42	22図	36	35	10	
15	22図	40	(22)	14	トノチ電線	43	22図	34	26	17	
16	22図	62	(60)	18	トノチ電線・人指・燻・採新	44	22図	31	29	20	
17	22図	30	26	6		45	22図	58	36	23	トノチ電線
18	22図	30	25	34	採新	46	22図	34	27	7	
19	23図	29	18	11		47	19図	69	30	12	
20	23図	36	36	29		48	19図	(34)	30	10	
21	26図	27	23	11		49	19図	37	(16)	19	トノチ電線
22	26図	68	63	8	観察用・採新	50	16図	39	(23)	17	採新
23	26図	13	18	10		51	19図	34	30	11	
24	26図	24	22	21	SB-03枝系・採新	52	19図	33	28	27	
25	26図	39	34	16		53	19図	26	(23)	11	P-54本筋
26	26図	26	(18)	28	P-27本筋	54	19図	29	26	24	P-53枝系
27	26図	25	21	9	P-26枝系	55	19図	28	22	12	
28	26図	30	26	13		56	20図	(28)	27	9	P-57枝系

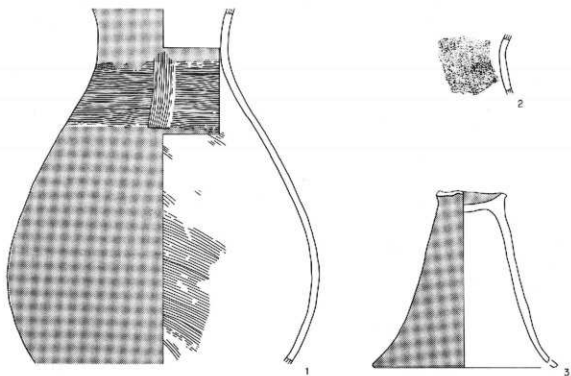
第 9 表 P 観 察 表

番号	区版	長径	短径	深さ	備 考(給・吐量)	番号	区版	長径	短径	深さ	備 考(給・吐量)
57	20区	36	(31)	20	P-56区給・吐量	92	17区	(59)	40	8	
58	20区	27	26	30		93	17区	32	31	18	
59	20区	32	29	24		94	17区	40	33	9	
60	19区	28	22	14	P-61区給	95	17区	24	21	9	
61	19区	22	(10)	14	P-60区給	96	17区	22	10	12	
62	19区	26	16	22	給吐給	97	21区	36	34	12	トンチ機
63	19区	28	(24)	16	P-64区給・給吐給	98	17区	27	25	12	P-99区給
64	19区	37	29	16	P-63区給	99	17区	32	14	14	P-98区給
65	19区	31	26	19		100	17区	25	22	14	
66	19区	28	26	8	P-67区給	101	17区	32	29	15	
67	19区	24	22	21	P-66区給	102	17区	25	23	10	
68	20区	28	24	18		103	21区	25	23	13	
69	16区	43	38	18		104	21区	26	23	19	
70	23区	39	25	22	P-71区給	105	18区	30	29	27	
71	23区	46	(40)	21	P-70区給	106	24区	30	29	16	
72	23区	24	23	12	P-73区給	107	24区	34	(28)	35	
73	23区	28	(20)	21	P-72区給	108	18区	42	34	44	
74	23区	28	27	11	SB-04区給	109	18区	28	29	26	
75	23区	31	28	18		110	28区	32	30	11	
76	23区	35	29	12		111	25区	12	10	10	
77	20区	27	25	24		112	29区	29	26	14	
78	20区	40	(38)	17	P-79区給	113	26区	66	41	15	SB-03区給
79	20区	52	42	22	P-78区給	114	23区	69	54	14	SB-04区給・土留
80	20区	28	24	23		115					短
81	20区	36	32	15		116	20区	34	28	12	
82	20区	36	(12)	19	P-83区給	117	17区	24	22	8	
83	20区	64	55	12	P-82区給・P-84区給	118	20区	26	24	14	
84	20区	36	31	20	P-83区給	119	21区	71	46	9	トンチ機
85	17区	40	36	23		120	24区	49	34	13	SB-06・P-120区給
86	17区	22	20	15		121	24区	49	(41)	63	SB-06区給・P-120区給
87	17区	31	27	8		122	24区	37	36	8	
88	17区	44	31	6		123	21区	55	48	11	
89	17区	24	22	5		124	21区	25	24	10	SB-05区給・土留・区給
90	17区	27	24	8		125	24区	36	34	12	
91	17区	27	26	12		126	27区	29	26	15	

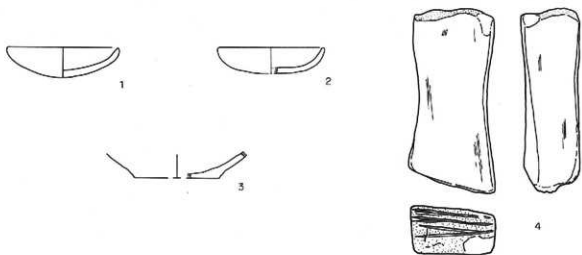
第10表 P 観察表

番号	図版	長径	短径	深さ	備考(給・出量)	番号	図版	長径	短径	深さ	備考(給・出量)
127	27図	56	50	27		144	19図	23	20	8	
128	26図	22	10	14		145	20図	24	20	10	
129	25図	12	10	8	SB-024%	146	20図	22	20	7	
130	16図	57	45	29		147	20図	33	29	8	
131	20図	17	16	9		148	20図	22	19	9	
132	16図	16	15	4		149	20図	30	23	8	
133	17図	15	14	8		150	20図	28	24	28	
134	17図	15	13	6		151	24図	36	34	15	
135	17図	13	11	7		152	24図	24	23	21	
136	21図	22	19	15		153	24図	26	(21)	23	
137	21図	40	34	47		154	24図	24	21	22	
138	21図	27	12	16		155	24図	40	40	24	
139	18図	26	19	12		156	24図	10	10	17	
140	22図	30	24	21		157	24図	23	19	19	
141	19図	17	14	8		158	21図	35	33	19	
142	19図	18	15	8		159	26図	19	18	24	
143	19図	12	11	7							

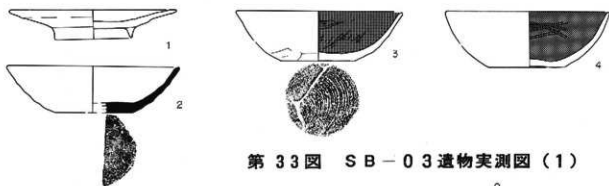
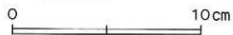
第11表 P 観察表



第 31 图 SB-01 遗物实测图

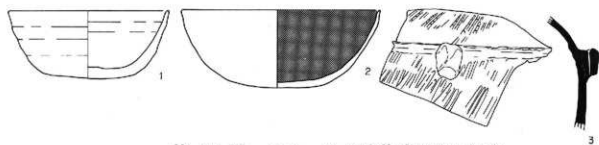


第 32 图 SB-02 遗物实测图

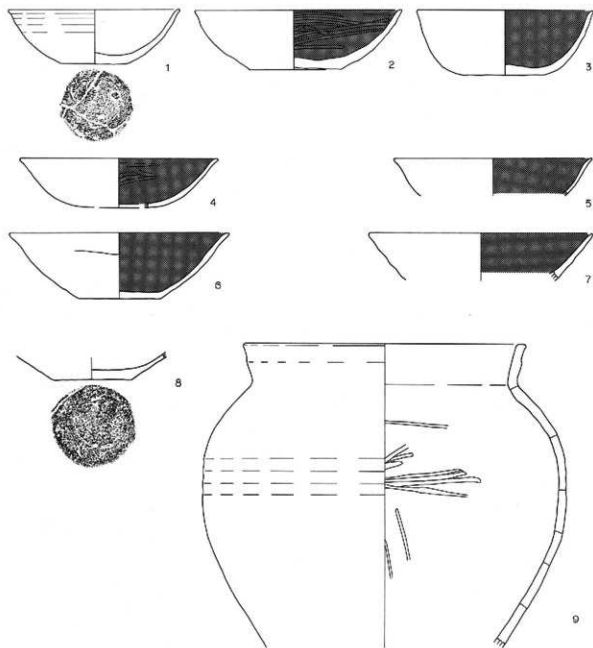


第 33 图 SB-03 遗物实测图 (1)



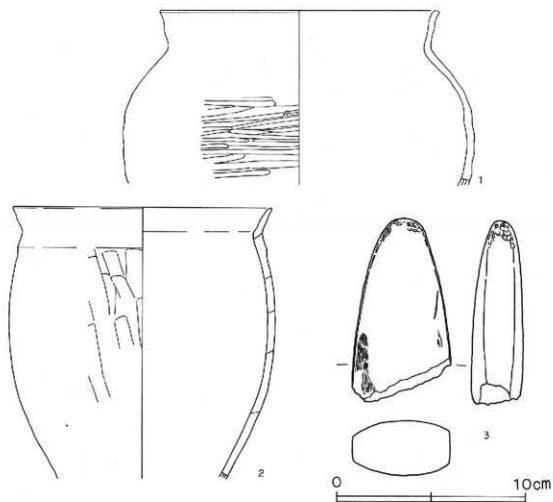


第 34 图 SB-03 遗物实测图 (2)

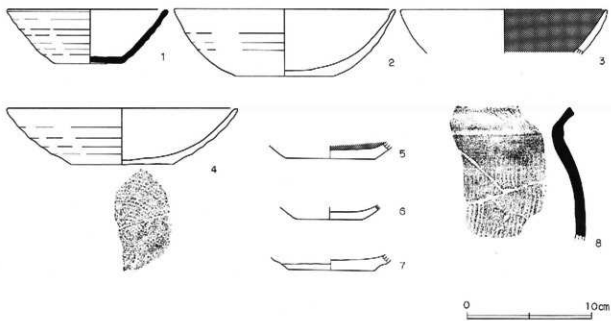


0 10 cm

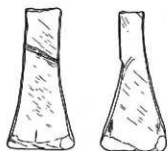
第 35 图 SB-04 遗物实测图 (1)



第 36 图 SB-04 遗物实测图 (2)



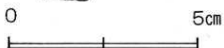
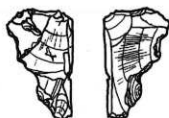
第 37 图 SB-05 遗物实测图



第 38 图 SB-06 遺物実測図



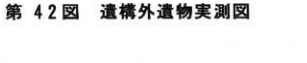
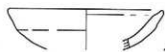
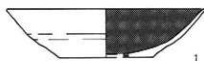
第 39 图 SK-07 遺物実測図



第 40 图 P-57 遺物実測図



第 41 图 P-16 遺物実測図



第 42 图 遺構外遺物実測図

遺構NO 図式NO	器種 種類	法 残	量 存	器 質	成形・形態ほか	整 形 ほ か
SB-01 31図-1	壺 弥生	残高 体～頸部	28.6 1/2	胎:0.1の赤褐色砂粒・粗 砂粒多く含む 焼:良 色:㊦)5YR7/8橙・7.5R4/6 赤(塗彩) ㊦)5YR6/8橙	イチジク状を呈 する	㊦)頸部縦位の磨き・肩部 磨削工具によるT字状施 文・体部斜位の磨き・ 肩部を除き赤色塗彩 ㊦)頸部横位の磨きと赤色 塗彩・体部斜位の刷毛目
SB-01 31図-2	甕 弥生	残高 頸部の一部	(5.8)	胎:粗砂粒含む 焼:良 色:㊦)7.5YR2/3極暗褐 ㊦)7.5YR5/6明褐		㊦)磨削状工具による波状施 文 ㊦)磨で
SB-01 31図-3	高环 弥生	残高 裾径 脚部	14.2 (7.4)	胎:粗砂粒・長石含む 焼:良 色:㊦)10YR5/6 赤(塗彩) ㊦)10YR5/6 赤(塗彩)	坏部との接合部 から内弯～外反 して開きの少な い裾に至る	㊦)縦位の細緻な磨き・裾 部横位の細緻な磨き ㊦)横位の磨削の後、上位 は縦位の、下位は横位の 細緻な磨き
SB-02 32図-1	皿 土師	口径 器高	(8.8) (2.4)	胎:0.05の赤褐色砂粒と 0.1の砂粒僅か含む 焼:良 色:㊦)10YR8/3 浅黄橙 ㊦)7.5YR8/4浅黄橙	丸底の底部から 僅かに内弯する 体部を経て、摘 み上げた口唇部 に至る	㊦)磨で ㊦)磨で
SB-02 32図-2	皿 土師	口径 器高	(8.6) (2.1)	胎:0.05の赤褐色砂粒と 0.1の砂粒僅か含む 焼:良 色:㊦)10YR8/3 浅黄橙 ㊦)7.5YR7/4にぶい橙	平底に近い丸底 の底部から内弯 直立して口縁部 に至る	㊦)口縁部横位の磨で・底部 磨で ㊦)横位の磨で
SB-02 32図-3	甕 土師	底径 底部	(6.8) 1/5	胎:0.4~0.6の礫・粗砂粒 僅かに含む 焼:良 色:㊦)7.5YR7/6橙 ㊦)7.5YR3/2黒褐		㊦)横位の磨削り ㊦)横位の磨で
SB-02 32図-4	砥石	長さ 幅 厚さ 重さ 完存	9.5 4.2 2.8 161g	質:珪藻土 色:2.5YR/3 淡黄	四角柱状・4面使用、底面に断面V字形の工 具痕	
SB-03 33図-1	皿 土師	口径 器高 底径 体部	6.7 2.6 6.1 3/4	胎:細砂粒・長石含む 焼:良 色:㊦)2.5YR7/6橙 ㊦)2.5YR6/6橙	付け高台の底部 から体部は外反 して開く	㊦)体部横位による磨で・底 部凹溝糸切り ㊦)横位による磨で
SB-03 33図-2	坏 須恵	口径 器高 底径 体部	13.7 3.8 6.4 1/4・底 部1/2	胎:粗砂粒ごく僅か含む 焼:良 酸化炭物成 色:㊦)7.5YR7/6橙 ㊦)7.5YR7/6橙	平底から横位成 型の縁を有し僅 かに内弯する体 部を経て、口縁 に向かって開く	㊦)体部横位による磨で・底 部凹溝糸切り ㊦)横位による磨で 横位右回転
SB-03 33図-3	坏 土師	口径 器高 底径 体部	13.3 3.9 6.0 3/4	胎:礫含む 焼:良 色:㊦)5YR7/4にぶい橙 ㊦)黒色処理	平底から内弯す る体部を経て口 縁に開く	㊦)口縁～体部上位横位による 磨で・体部下位磨削り ・底部凹溝糸切り ㊦)斜位の磨き

第12表 出土遺物観察表(1)

遺構NO 図面NO	器種 種類	法 残	量 存	器 質	成形・形態ほか	整 形 ほ か
SB-03 33図-4	坏 土師	口径 器高 底径 口縁1/2	13.1 4.9 6.2	胎: 0.2の礫・粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)10YR7/4 にぶい黄橙 ㊦)黒色処理	轆轤成形・ごく 僅かな上げ底から 体部は内湾し て立ち上がる	㊦)轆轤による撫で・底部回 転糸切りの後調整 ㊦)横位の磨磨き
SB-03 34図-1	坏 土師	口径 器高 底径 口縁1/4欠	12.8 5.4 7.4	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)10Y5/8赤 ㊦)10Y5/8赤	平底から体部に 内湾して立ち上 がる	㊦)轆轤による撫で・体部下 位調整で・底部回転糸切 り ㊦)横位の磨磨き
SB-03 34図-2	坏 土師	口径 器高 底径 2/3	16.0 6.3 7.8	胎: 粗砂粒多く含む 焼; 良 色; ㊦)2.5YR6/6橙 ㊦)黒色処理	丸底(味の)底部 から内湾して体 部に立ち上がり 口縁は僅かに外 反する	㊦)体部轆轤による撫で・底 部回転糸切りの後調整 ㊦)磨磨き
SB-03 34図-3	壺 須恵	残高 (9.3) 肩部の一部		胎: 細砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)10YR5/1 灰 ㊦)10YR6/1 灰	肩部に鈎を巡ら せ、中途まで穴 を穿った耳が貼 付する	㊦)格子目状の叩き ㊦)格子目状の叩き
SB-04 35図-1	坏 土師	口径 (13.6) 器高 底径 底~体部	4.4 5.3	胎: 0.2~0.5の礫含む 焼; 良 色; ㊦)2.5YR6/6明赤褐 ㊦)黒色処理	平底から体部に 内湾して開き、 口縁部で僅かに 外反する	㊦)体部轆轤による撫で・底 部回転糸切り ㊦)縦位の磨磨き
SB-04 35図-2	坏 土師	口径 器高 底径 ほぼ完存	16.6 4.8 7.4	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)2.5YR6/6明赤褐 ㊦)黒色処理	平底から体部に 内湾して開く・ 器形に至みがあ る	㊦)体部轆轤による撫で 底部回転糸切り ㊦)横位の磨磨き
SB-04 35図-3	坏 土師	口径 器高 底径 底~体部	14.2 5.2 6.6	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)7.5YR7/8黄橙 ㊦)黒色処理	平底の底部から 内湾して体部に 立ち上がり口縁 は僅かに外反す る	㊦)轆轤による撫で・底部回 転糸切りの後調整 (削 り) ㊦)横位の磨磨き? 磨耗が著 しい
SB-04 35図-4	坏 土師	口径 器高 底径 体~口縁部	8.0 4.0 5.6	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)10YR6/4 明黄褐 ㊦)黒色処理	体部は内湾して 開き、口縁部は 外反する	㊦)轆轤による撫で ㊦)横位の磨磨き
SB-04 35図-5	坏 土師	口径 残高 口縁1/6	(8.0) 5.0	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)10YR6/3 にぶい黄橙 ㊦)黒色処理	口縁部外反する	㊦)轆轤による撫で ㊦)磨磨き
SB-04 35図-6	坏 土師	口径 器高 底径 1/4	17.4 5.3 6.3	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)5YR6/6橙 ㊦)黒色処理	平底から内湾の 緩い体部を経て 口縁に向かい直 線的に開く	㊦)轆轤による撫で・底部回 転糸切り ㊦)横位の磨磨き? 磨耗が著 しい
SB-04 35図-7	坏 土師	口径 器高 口縁1/6	18.0 3.8	胎: 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)7.5YR6/8橙 ㊦)黒色処理	体部外面に低く 緩い稜を有する	㊦)轆轤による撫で ㊦)横位の磨磨き

第13表 出土遺物観察表(2)

遺構NO 図番NO	器種 種類	法 量 残 存	器 質	成形・形態ほか	整 形 ほか
SB-04 35図-8	坏 土師	残高 2.3 底径 6.2 底部	胎:粗砂粒多く含む 焼:良 色; A)2.5YR6/8橙 B)黒色処理	平底から体部に 屈曲して立ち上 がる	A)横位の撫で・底部回転糸 切り B)底磨き
SB-04 35図-9	甕 土師	口径 22.7 残高 24.5 胴~口縁部1/ 3	胎:白色・黒色の粗砂粒含 む 焼:良 色; A)7.5YR7/4にぶい橙 B)7.5YR8/6にぶい橙	最大径を胴部上 位に有し、「く」 の字状に屈曲 する頸部を経て 面取りの施され た口縁に至る・ 粘土帯積み上げ	A)轆轤による撫での後、横 位の筒撫でと一部に底磨 き B)横位の筒撫でと一部に底 磨き
SB-04 36図-1	甕 土師	口径 11.4 残高 14.1 胴~口縁部1/ 6	胎:粗砂粒僅か含む 焼:良 色; A)7.5YR6/8橙 B)10YR7/6 明黄	最大径を胴部上 位に有し、「く」 の字状に屈曲 する頸部を経て 面取りの施され た口縁に至る	A)横位の筒撫でと一部に底 磨き B)横位の筒撫でと一部に底 磨き
SB-04 36図-2	甕 土師	口径 20.6 残高 21.9 胴部上位1/4	胎:粗砂粒含む 焼:良 色; A)2.5YR6/8橙 B)5YR7/8橙	卵状の胴部から 緩く「く」の字 に屈曲する頸部 を経て外傾する 口縁に至る	A)口縁部横位の撫で・胴部 縦位の筒削り B)横位の撫で
SB-04 36図-3	石斧	残長 9.8 幅 5.1 厚さ 2.9 重さ 255g 刃部欠	質:閃緑岩 色:10Y4/2オリーブ灰	磨製、基部に打突痕	
SB-05 37図-1	坏 須恵	口径 12.8 器高 4.3 底径 5.4 1/3	胎:微砂粒含む 焼:良 色; A)10Y6/1オリーブ灰 B)10Y5/1灰	上げ底の底部から 体部は直線的 に外傾して開く	A)轆轤による撫で・底部回 転糸切り B)轆轤による撫で
SB-05 37図-2	坏 土師	口径 17.8 器高 5.3 底径 7.9 1/2	胎:微砂粒含む 焼:良 色; A)5YR6/4にぶい橙 B)7.5YR6/6橙	平底から内湾す る体部を経て口 縁に立ち上がる	A)轆轤による撫で・体部下 位筒削り・底部? B)底磨き
SB-05 37図-3	坏 土師	口径 16.6 残高 (3.5) 1/6	胎:粗砂粒含む 焼:良 色; A)5YR7/6橙 B)黒色処理		A)横位の撫で B)底磨き
SB-05 37図-4	坏 土師	口径 (18.4) 器高 4.5 底径 8.1 底~体部1/6	胎:粗砂粒多く含む 焼:良 色; A)7.5YR7/6橙 B)7.5YR5/1褐灰	轆轤成型・体部 に稜を有する	A)轆轤による撫で・底部回 転糸切り B)轆轤による撫で
SB-05 37図-5	坏 土師	残高 1.0 底径 7.0 底部2/3	胎:粗砂粒多く含む 焼:良 色; A)7.5YR8/4浅黄橙 B)黒色処理		A)底部回転糸切り B)縦位の底磨き

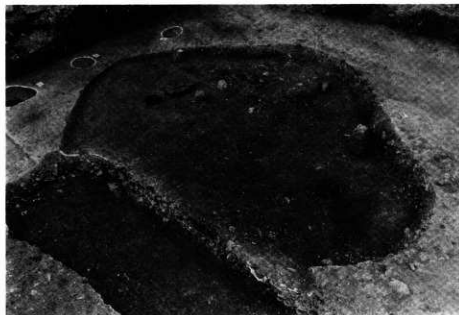
第14表 出土遺物観察表(3)

遺物NO 図版NO	器種 種類	法残 量存	器 質	成形・形態ほか	整 形 ほ か
SB-05 37図-6	坏 土師	残高 1.2 底径 5.1 底部1/2	胎; 0.15の粗砂粒多く含む 焼; 良 色; ㊦)7.5YR6/4にぶい橙 ㊧)7.5YR7/4にぶい橙		㊦)底部回転糸切り ㊧)磨耗が著しい
SB-05 37図-7	坏 土師	残高 1.3 底径 6.8 底部	胎; 0.1の粗砂粒多く含む 焼; 良 色; ㊦)2.5YR5/6明赤褐 ㊧)2.5YR6/8橙	轆轤成型	㊦)底部回転糸切りの後撫で ㊧)磨磨き
SB-05 37図-8	甕 須恵	残高 10.7 胴~口縁部の 一部	胎; 0.2の礫・粗砂粒多く 含む 焼; 良 色; ㊦)2.5YR7/8橙 ㊧)2.5YR7/6橙	口唇部に面取り を施す	㊦)口縁~頸部横位の撫で・ 胴部平行紋の叩き ㊧)撫で
SB-06 38図-1	砥石	長さ 7.5 幅 3.6 厚さ 3.4 重さ 86g 完存	質; 珪藻土 色; 5GY6/1オリーブ灰	4角柱状・4面使用、内1面に使用による段 差がつく・底面に断面V字形の工具痕	
SK-07 39図-1	焼 灰軸 陶器	残高 1.4 底径 7.1 底部	胎; 細砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)7.5Y7/1 灰 ㊧)7.5Y7/1 灰	付け高台は短く 内湾する	㊦)撫で ㊧)撫で 灰軸は漬け掛け
P-57 40図-1	剥片	長さ 2.9 幅 1.7 厚さ 0.5 重さ 3.1g	質; 黒耀石 色; 黒色		
P-16 41図-1	銅銭	直径 2.6 厚さ 0.1 重さ 2.5g 完存		「大口口竇」・人骨(頭骨)とともに出土	
N64E26 42図-1	坏 土師	口径(16.0) 器高 3.9 底径 7.4 1/6	胎; 礫含む 焼; 良 色; ㊦)7.5YR7/3にぶい橙 ㊧)黒色処理	平底から体部は 僅かに内湾して 開く	㊦)撫で・底部回転糸切り ㊧)磨磨き
N67E22 42図-2	皿 土師	口径 12.4 残高 3.2 口縁部1/5	胎; 粗砂粒少量含む 焼; 良 色; ㊦)10YR7/3 にぶい黄橙 ㊧)10YR7/4 にぶい黄橙		㊦)横位の撫で ㊧)横位の撫で
N66E24 42図-3	坏 土師	残高 1.5 底径 5.3 底部	胎; 粗砂粒少量含む 焼; 良 色; ㊦)7.5YR6/6橙 ㊧)黒色処理		㊦)撫で ㊧)底部回転糸切り
N66E24 42図-4	坏 土師	残高 2.0 底径 5.3 底部の一部	胎; 粗砂粒含む 焼; 良 色; ㊦)7.5YR7/4にぶい橙 ㊧)黒色処理		㊦)轆轤による撫で・底部回 転糸切り ㊧)磨磨き

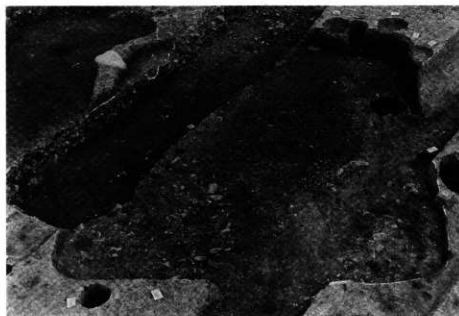
第15表 出土遺物観察表(4)

遺構NO 図面NO	器種 種類	法 残	量 存	器 質	成形・形態ほか	整 形 ほ か
N66E24 42図-5	坏 土師	残高 底径 底部	2.2 6.9	胎:粗砂粒含む 焼:良 色:黄)7.5YR7/6橙 黄)黑色処理	付け高台	黄)継ぎによる撫で・底部回 転糸切り 黄)窪磨き?磨耗が著しい
N64E28 42図-6	甕 須恵	残高 底径 胴部1 / 6	6.3 (9.8)	胎:粗砂粒含む 焼:良 色:黄)2.5Y6/1 黄灰 黄)2.5Y6/1 黄灰		黄)筒削りの後叩き 黄)筒削りの後撫で 自然釉が掛かる
N66E23 42図-7	碗 磁器	口径 残高 体部1 / 5	8.5 5.2	胎: 焼:良 色:黄)7.5GY8/1明濁灰 黄)10Y7/1灰白		黄) 黄) 染め付

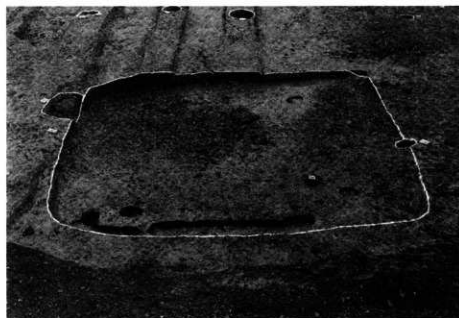
第 16 表 出土遺物観察表(5)



SB-01
(南東から)

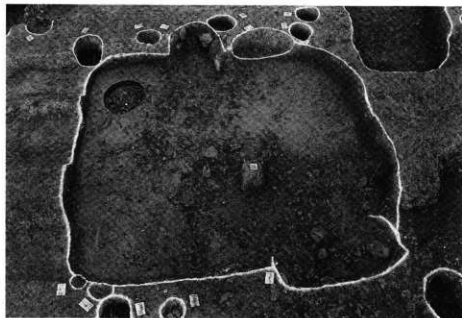


SB-02
(南西から)

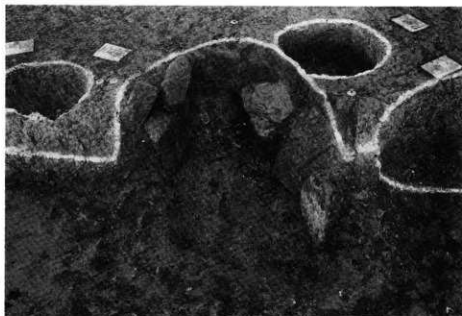


SB-03
(西から)

SB-04
(南から)

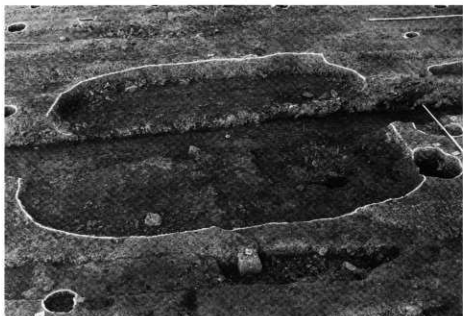


SB-04 竪
(南から)



SB-05
(南から)





SB-06
(南から)



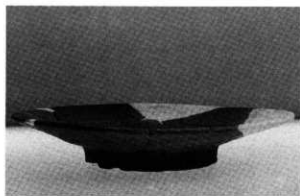
P-16 人骨出土状況
(西から)



P-16 人骨
(北東から)



SB-01壺 (第31図-1)



SB-03皿 (第33図-1)



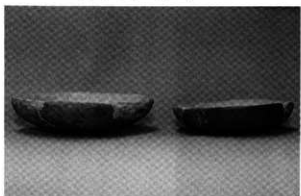
SB-03坏 (第33図-3)



SB-01高坏 (第31図-3)



SB-03坏 (第33図-4)



左・SB-02皿 (第32図-1)
右・SB-02皿 (第32図-2)



SB-03坏 (第34図-1)



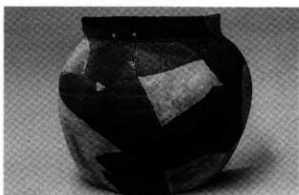
SB-03坏 (第34图-2)



SB-04坏 (第35图-6)



SB-04坏 (第35图-1)



SB-04甕 (第35图-9)



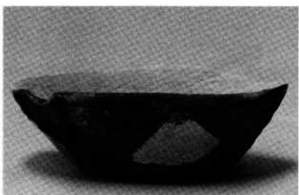
SB-04坏 (第35图-2)



SB-04甕 (第36图-2)



SB-04坏 (第35图-3)



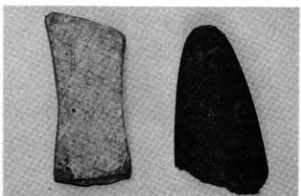
SB-05坏 (第37图-1)



SB-05坏 (第37图-2)



N66E23碗 (第42图-7)



左・SB-02砾石 (第32图-4)
右・SB-04石斧 (第36图-3)



調査風景(1)



調査風景(2)



調査風景(3)



調査風景(4)



調査風景(5)



調査区全景 (南から)



調査区全景 (西から)



調査区全景 (西から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はちまんうらいせき ご
書名	八幡裏遺跡Ⅴ
副書名	国立長野病院北側駐車場造成に伴う遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第77集
編著者名	中沢徳士・久保田敦子・望月貴弘・古野明子・須齋千恵子
編集機関	上田市教育委員会
所在地	長野県上田市天神二丁目4番74号 (☎386-0025)
発行年月日	1999年3月25日
(ふりがな) 所収遺跡名	はちまんうらいせき 八幡裏遺跡
(ふりがな) 所在地	ながの けい うえだ し 長野県上田市中央北三丁目3, 253-4
コード(市計・建研)	20203・64
北緯・東経	138° 15' 3" ・ 36° 24' 6"
調査期間	1998年2月9日～3月10日
調査面積	1,200㎡
調査原因	国立長野病院北側駐車場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡裏遺跡	集落址	弥生時代 奈良～ 平安時代	竪穴住居址 6 土壌 7	弥生土器 土師器 須恵器	

上田市文化財調査報告書第77集

八 幡 裏 遺 跡 Ⅴ

国立長野病院北側駐車場造成に伴う遺跡発掘調査報告書

発行日 平成11年3月25日

発行 上田市土地開発公社

編集 上田市・上田市教育委員会

長野県上田市天神二丁目4番74号

☎0268(23)5102 ☎386-0025

印刷 有限会社伸和印刷